

第21回：いただく

教場長 田中仙融

抹茶の飲み方をお伝えしていると「あら？」と思うことがあります。

「お先に」と「頂戴します」と挨拶をして、茶碗をいただいて正面を避けるようにして回し、と説明しますと、「茶碗をいただくのですか」という質問が返ってくるからです。

通じないのかしらという気持ちと、どのように説明したらよいのでしょうかという戸惑いが生じます。ある本を読んでいたら、その疑問が解けました。

「いただくということは、恭しく押し頂くことで、それに感謝する気持ちである」改めて言葉の持つ意味を考えてみればわかることでした。

しかし、動作を主として、押し頂く対象は何かといわれると、自信のない自分がそこにいたことにはじめて気が付きました。私たちは、感謝する気持ちを思いださなくてはいけないのではないかと。

先般、『茶花の宇宙』という本を著しましたが、その中でも日本には四季があると書きました。今の私たちには当たり前の事なのですが、現在の温暖化を考えると後 2,30 年後には、夏と冬しかない亜熱帯になってしまうかもしれません。

そのとき、四季があったことを本当にありがたかったと思うのでしょう。

茶道の楽しみには四季折々の趣向があることが外せません。今はだれもありがたいことだと思っていないかもしれませんが、自然の恵みの恩恵を受けていることは確かです。

炭で湯を沸かし、茶を飲む。みなさんも電気で沸かした湯よりも、ゆっくりと炭で沸いた湯がどんなに美味しいかをご存知でしょう。炭が使える場所も少なくなり、炭そのものも良いものが手に入りにくくなっています。

一服の抹茶がいただけること、そのこと自体が本当にいろいろな恵みのおかげなのだとなんが所作と共に伝えていくこと。伝えられることがもしかすると素敵な茶人なのではないでしょうか。どんなに道具が素晴らしい、抹茶や菓子が美味しいと褒めることよりも、まずは、今それを拝見し頂戴できることに感謝できる人になり、そんな人を育てていきたいと思いませんか。